

平成二十五年度 入学試験問題

国 語

第一回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

これまで人類は科学の力によって、多くのことを解明してきました。しかし、真実を頭で理解してはいても、それを心の底から実感するのは簡単ではありません。

たとえば、いわゆる天動説を信じている現代人はいないでしょう。コペルニクスやガリレオのおかげで、太陽が地球のまわりを回っているのではなく、地球が太陽のまわりを回っていることがわかってから、もう何百年も経っています。

ところが私たちが、いまでも「日が昇る」「日が沈む」といういい方をやめようとしません。動いているのは太陽ではなく地球のほうなのに、「地球が動いて太陽が見えた(見えなくなった)」ということを表す簡潔な言葉はありません。A 天文学者たちは別のいい方をしてもよさそうなものですが、やはり「日が昇る」といいます。つまり私たちは、頭では地動説を受け入れていても、日常生活では相変わらず天動説的な感覚を持って暮らしているわけです。

それだけではありません。天動説から地動説へ転換する以前に、人類は地球が丸いことも発見しました。これも、頭では誰もが理解しているはずですが、しかし実際には、相変わらず自分たちが球面ではなく、平面の上で暮らしているように感じている人がほとんどではないでしょうか。

ポルトガルのタンケン家フェルディナンド・マゼランの艦隊が世界一周に成功するまで、ヨーロッパの人々は、大西洋の向こう側は断崖絶壁だと思っていました。この世界は水平線のところで終わりだと信じていたので、ところが、その世界の果てに向かってまっすぐ進んでいくと、向こう側に落ちることなく、ぐるりと回って戻ってくる。それを知ったとき、当時の人々は相当なショックを受けたに違いありません。

それ以来、人類が球面上で生きていることが頭の中の(1)ジヨウシキにはなりました。しかし、宇宙から撮影した地球の写真でも見れば話は別ですが、日常的に目にする世界はやはり平面です。そのため私たちは、自分たちが球面上で暮らしていることがなかなか実感できません。

B 二〇〇一年九月一日の米国同時多発テロは、日本時間の夜に発生した事件でした。ところが現場の様子を生中継するテレビを見ると、朝の明るい空の下で、世界貿易センタービルが煙を上げながら崩壊していま

す。時差があるので当然なのですが、あの光景を見ながら違和感を覚えた人は多かったでしょう。頭では「日本の夜はアメリカの昼」であっても、(3) ことが不思議に思ってしまうのです。だからテレビに映る光景に、どうもリアリティが感じられません。何となく、ウソの風景を見ているような気持ちにさえなるのです。

こんな感覚は、テレビが広く普及するまで誰も味わったことがありませんでした。それ以前は、どんな大事件も過去の出来事としてしか見ることに感じられませんでした。私たちはそんな「平面思考」をいまだに引きずっているのです。昼と夜が同時に存在する球面上の出来事をうまく把握できないのではないのでしょうか。

球面になじんでいないのは、感覚や思考だけではありません。ヨーロッパやアメリカなどの遠い国を訪れたことのある人は、時差ボケを経験したことがあるでしょう。これも、科学技術が未発達だった時代にはあり得ませんでした。ジェット機で短時間のうちに遠くまで移動できるようになった結果、身体の時感覚と現実の時間のあいだにギャップが生じ、(4) セイリ的な不快感になるわけです。人間が時差ボケに苦しむようになってずいぶんになりますが、このギャップを埋める方法は、まだないようです。

いずれにしろ、人類はまだ「平面思考」から「球面思考」への転換が十分にできていないといえるでしょう。

昔の人間は小さな世界で生活していましたから、本当は球面上で暮らしていても、それを意識する必要がありませんでした。どこまでも同じ平面が続いているという前提で、物事を考えていけばよかったです。

ところがテクノロジの発達によって、私たちは遠い国の映像を生中継で見たり、短時間で遠くまで移動できるようになりました。以前よりもはるかに大きな世界の中で生活するようになったわけです。しかし私たちの思考は、この変化に対応しきれいていません。球面思考を身につけなければ大きな世界に対応できないのに、いまだに古くからの平面思考によって生きています。

C、それを克服する努力がまったくないわけではありません。たとえば幾何学の分野では、一九世紀に「非ユークリッド幾何学」が生まれました。平面上の図形を扱うユークリッド幾何学と違い、こちらは球面、曲面での幾何学です。そこでは、たとえば平行線が交わることもあるし、三角

形の内角の和も一八〇度ではありません。球面上に三角形を描けば、内角の和が一八〇度よりも大きくなります。平面思考と球面思考では、単純な図形にも大きな違いが生じるわけです。球面上の出来事を平面思考で把握していれば、大きな錯覚や「ゴカイが生じかねません」。

D、二〇世紀の初頭には、美術の分野で「キュビズム」が生まれました。パブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックによつて創始された技法です。それまでの「カイガがひとつの視点から見たものを描いていたのに対し、彼らはさまざまな角度から見たものをひとつの画面に描き込みました。」「キューブ」は立方体のことですが、これも一種の球面思考といえるでしょう。一枚の絵の中に正面から見た顔と横顔が同時に存在するのは、地球上に昼と夜が同時に存在するようなものです。

このように、平面思考から抜け出して、球面をとらえようとする思考法はこれまでにいくつか提案されてきました。しかし私たちは、それを日常的にはつきりと意識するレベルにまではなっていない。たとえば南米のブラジルやアルゼンチンなどを「地球の裏側」と表現するのも、平面思考の表れでしょう。実際には、球面に裏側などありません。日本からまっすぐに進んでいけば、平面の端を回り込むことなしに、つまり裏側へ回ることなく南米まで行けます。

ちなみにイギリス人は、この日本とブラジルのような位置関係のことを「対蹠地」もしくは「対蹠点」と名付けました。この言葉が生まれたのは、南半球のニュージーランドやオーストラリアを植民地にしたときのこと。当初は地の果て、地球の裏側などと呼んでいましたが、そのいい方は現地の人々の反感を(5)ため、そんな言葉を考え出したのです。これは、平面思考から球面思考への転換を図る工夫と考えてよいでしょう。

遠く離れた外国を裏側にあると考えると、そこが自分たちとつながりのある場所だと思いにくくなります。それでは、世界で起きていることを正しく理解できません。特にいまは、情報技術の発達で世界が狭くなっている時代。外国のことを、自分たちと切り離れた別の場所だと思つていようでは、国際関係がうまくいくはずがありません。外交官や政治家も、平面思考で外国とつきあっているから摩擦や戦争が起こるのかもしれない。球面思考で、お互いにつながった存在としてつきあっていけば、衝突を避けられるのではないかと思います。

(外山滋比古『考えるとはどういうことか』)

95

90

85

80

75

70

65

★ギャップ：へだたり。

問一 — (1)「私たちは、いまでも『日が昇る』『日が沈む』といういい方をやめようとしません。」とありますが、ここから私たちのどのような実情がわかりますか。本文の表現を用いて五十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問二 — (2)「平面の上で暮らしているように感じている人がほとんどではないでしょうか。」とありますが、それはなぜですか。本文の表現を用いて五十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問三 — (3)に入れるのにふさわしい十一字の表現を本文から抜き出しなさい。

問四 — (4)「球面をとらえようとする思考法」とありますが、この思考法がなぜ私たちにとって重要なのですか。本文全体をふまえ、八十文字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問五 — (5)に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 売る イ 聞く ウ 見る エ 買う

問六 — A、Dに入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア また イ せめて ウ もちろん エ たとえば

問七 — (ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地球が太陽のまわりを回っていることがわかってから何百年も経ったが、私たちはその真実をいまだに頭で理解できないまま暮らし続けている。

イ 科学技術の発達によって時差ボケという現象が発生したが、科学技術の力によってこの時差ボケの問題を解決する方法が発見されつつある。

ウ テクノロジーが発達する前の人間も球面上で暮らしていたわけであるが、日常生活では平面上で暮らしていると考えていて問題はなかった。

エ 「非ユークリッド幾何学」や「キュビズム」、また、私たちがブラジルやアルゼンチンを「地球の裏側」と表現するのもすべて一種の球面思考である。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「じゃあさ、今日は、なんでわざわざ私にそんなこと言いに来たのよ」

「ああ、それは、⁽¹⁾ 琴梨がお前のこと、なんか心配してたから」

「えっ」

「月曜日から妹の様子がおかしいんだけど、学校でなにかあったか知らないかって聞かれたんだ。クラスがちがうからわかんねえけど、そういえば、朝礼の時、俺、声かけたって言ったら、それが原因だって言われてさ。意味わかんねえし、直接聞きに来たんだ。なんで、俺がしゃべりかけたら、お前は元気がなくなつて、学校まで休んじやうわけ？」

途方に (2) た藤崎翔音の顔を見て、私はプツと吹きだした。

「お前、さつきから、笑いすぎ」

藤崎翔音が、口をとがらせる。

その表情を見て、また爆笑してしまった。

そんなの、聞かれても困る。

私にだって、わかんないんだから。

そうだよ。どうして、藤崎翔音にしゃべりかけられただけで、私がみんなにハズされて、世界の終わりみたいに絶望しなきゃいかんのだ。

ホント、意味わかんねえし！

笑つて、笑つて、おなかをかかえて笑つたら、目じりから涙までこぼれ落ちた。けど、まわりが暗いせいで、藤崎翔音には気づかれずにすんだ。

ベンチの後ろから聞こえる、虫の声。

(3) の夕暮れとは肌触りがちがう、素っ気ない空気。

そして、キンモクセイの甘い香り。

おとといと同じ時間、同じ場所なのに、今日はまたちがう日なんだな。当たり前なのに、今さら気がつく。

そんなふうはまだ気づいていないことが、私にはたくさんあるだろう。多分。

いきなり、私たちの座っているベンチのそばの街灯がついた。

藤崎翔音が、からだを A ふるわせた。

「わっ、びびったあー」

そう言つて、笑つた。ほおにかかった前髪を、左手ではらいのけて。

こいつ、やつぱかっこいい。

30

25

20

15

10

5

顔がかっこいいのは、知つた。サッカー部なのにテニスがうまいのも、成績がいいことも、女子に人気があることも。

「ただ、こんなによくしゃべることや、笑うと右の八重歯が見えること、実は単純でわかりやすいやつだつてことは、多分みんな知らないんじゃないかな……」

あゆは、こんな藤崎翔音も知つていたんだろうか？

知つてて、好きになつたんだろうか？

その時、急に思ひだした。私、なんで今日に限つて、こんな服着てるんだ？

足もとを見て、さらに落ちこむ。

(……っつかけだし)

そんな私に構わず、藤崎翔音がこつちを向いた。

「ま、なんかよくわかんねえけど、お前、大丈夫そうだよな。俺の話は、こんだけ。お前んちの母さんと約束したし、送るよ」

「あ、うん」

まだ、話を聞きたい。なぜか、そう思った。

街灯の明かりに照らされた、藤崎翔音の横顔。

私のおねえちゃんを好きだという、男の子。

ママ、本当だね。⁽⁴⁾ 時間つてあつという間に過ぎてしまう。

「しなちゃあん」

「えっ」

砂場の向こう側、パンダの総合遊具の横に、真彩母と自転車の後部座席に乗つた真彩ちゃんがいた。

「いるりしなちゃあん」

真彩ちゃんは後部座席から降りると、パンダの総合遊具の横をおそるおそるすり抜け、私の方へ寄つてきた。

(プツ、まだ、信じてるんだ)

真彩ちゃんのおびえた表情を見て、私はこつそり笑う。

その後を、真彩母が自転車をおしながら、追いかけてきた。

真彩母の印象が、なんだかちがう。近くまできて、ああ、そうかと納得した。インド象じゃないからだ。カーキのブルゾンにボーダーシャツと、茶色いパンツをはいている。よく見ると、くちびるが淡いピンクに染まっていた。

60

55

50

45

40

35

「あ、あの、すみません。おじやまして……」

藤崎翔音と私の顔をちらちらと見比べて、ほおを赤く染めた。

「どうやら、かんちがいしているらしい。」

「あなたの名前も連絡先もわからないから、ここに来たらもしかして、また会えるかと思って……」

「しなちゃん！ いるりしなちゃんっ！」

真彩ちゃんが、私のひざにもたれて歌うように言う。

「いるりしな……じゃ、ないですよね？」

プツ

私は思わず吹きだした。

「ちがうよ。き、う、ち、ひ、な！ この前も教えたじゃん」

「い！ る！ り！ し！ な？」

「あー、はいはい。それで？ どうかしたんですか？」

「あ、あの、おかげさまで、あの後、沙綾ちゃんたちと遊ぶことができ、それでまた明日、遊ぶ約束してもらえたんです」

真彩母は、相変わらずぼそぼそと小声で話す。けれど、顔はまっすぐこちらを向いていた。

「そうなんですかあ。よかったですねえ」

「沙綾ちゃんママ、私と同じ年で、ケーキ作りが趣味で、好きな雑誌アーティストも同じだったんです。それで、うちに遊びにきたいって言うてくれて」

あの女子大生みたいな母親と、真彩母にそんなにたくさん共通点があったとは……。

やっぱり、人って見かけだけじゃわからない。

「あの、ひなさんのおかげです。ありがとうございます」

真彩母は、巨大な体を二つに折った。あまりの勢いに、小さい風が起る。

「それで、あの、これ、私のメールアドレスです。よかつたら、また、うちに遊びに来てください。ケーキ、ごちそうします」

小さいカードを、さしだした。

びつくりするくらいかわいらしい文字で、B名前や住所、ケータイ番号、アドレスが書かれている。

真彩母は、米田花蓮というらしい。なんちゅうラブリーな名前だ。

95

90

85

80

75

70

65

「あ、しこうきつっ！」

突然、真彩ちゃんが空を指さす。

つられて、私も、真彩母も、藤崎翔音も顔をあげる。

夜の闇から逃げだすように、灰色の雲が流れていく。そこに、白い小さな飛行機が、時々またたきながら、まっすぐすすんでいく。その横には、ママのほくろみたいな半月。

「ああ、本当。お月様も出てるねえ」

真彩母が、のんびり答える。

おととい見あげた空は、私の心とは正反対の青くさわやかな空だった。今はどす黒くて、なんだか悪いことでも起こりそうなお色。

だけど私の心は、すっきり晴れ渡ってる。

空の色なんて、関係ない。

私がどう感じるか、なんだ。

「じゃあ、あの、おじやまして、すみませんでした」

私と藤崎翔音に、それぞれぺこりと頭をさげて、真彩母はC自転車の向きを変えた。

「しなちゃんっ、どうぞっ！ ばあやのっ、どうぞっ」

真彩ちゃんが、あわててなにかさしだした。

ぼうしつきのどんぐりが、一つ。

「これ、あなたのたからものじゃん。いいの？」

「どうぞ、しなちゃん、いいよ！」

「サンキュ」

私が頭をなでると、真彩ちゃんは顔をくしゃくしゃにして笑った。

はなをたらしめた、変なちび。

かわいい、私の友だち。

「じゃあ、あの、失礼します」

真彩ちゃんが後部座席に乗ったのを確認して、真彩母が、例の曲芸のくまみたいなハンドルさばきでDこぎだす。

「しなちゃん！ おわくちよく、ばたねっ」

真彩ちゃんが、小指をぴんと立てて私に手をふった。

「オッケー！ 『おわくちよく』だよ。バイバイ」

私も、小指を立てて手をふる。となりの藤崎翔音も、手をふっていた。自転車は遠くなって、木の植えこみのかげで、ふっと見えなくなった。

130

125

120

115

110

105

100

「なに？ 親戚かなにか？」

ずっと黙っていた藤崎翔音が、私を見る。

私は真彩母からもらったカードと、真彩ちゃんからもらったどんぐりを

見つめて、「ふうん、友だち」と、笑った。

「おつもしれえ友だちがいるんだな」

「そうだよ、いいでしょ。二人とも、私の友だち」

私は、そっとカードを両手で包んだ。

「やべえ。六時ちよつとすぎてんぞ。早く帰んなきゃ」

「あ、うん」

あわてて立ちあがるうとして、ベンチに手をついた時、なにかが手に触れた。

どんぐり。ぼうしがついている。

「ねえ、藤崎」

私はとっさにそのどんぐりをつかんで、藤崎翔音の手をとった。

「これ、あげる」

「え、なに？ どんぐり？ さっきの子にもらったやつじゃねえの？」

「ちがうよ。今、見つけた。言っとくけど、これ、そんじよそこらのどんぐりじゃないよ。ぼうしつきだよ？ 四つ葉のクローバー並に、ラッキーなんだから」

藤崎翔音の手が、思いがけずあたたくて、私はぱっと手を放した。

「へえ、サンキュ」

藤崎翔音は、どんぐりをてのひらに包んで、ポケットに入れた。

「あの、……ありがとう」

「えっ、なにが？」

「なにがって、いろいろ！ でもさあ、あんた、これだけよくしゃべんの

に、なんで学校では女子としゃべんないの？」

「はあ？ 別に、理由なんてねえよ。しゃべりたきゃしゃべるし、しゃべりたくなきゃしゃべらねえ。それ、普通だろ？」

「あんたは、いろいろ普通じゃねえっつーの！ 自覚しろ」

「なんだよ、それ」

藤崎翔音が笑う。

私が、肩をたたく。

なんだ、簡単じゃん。

160

155

150

145

140

135

(6) 頭の中であれこれ考えないで、ただ笑って、話して……。
好きなら、好き。

しゃべりたきゃ、しゃべる。

それで、いいんだ。

だめなら、その時考えればいい。

二人で並んで、くだらない話をしながら家まで歩いた。

途中、同じ中学の子たち何人かとすれちがった。

あからさまにこつちを指さしている子もいたけど、不思議と平気だった。

またうわさになっちゃうけど、それでもいい。

藤崎翔音と一緒に話をしながら歩く方が、いいと思ったから。

なんなんだ、この気持ちとは？ 今まで経験したことのない、この感情。

答えが見つかる前に、私の家が見えてきた。

ママが、門の前で手をふっている。

(宮下恵菜『ガール！ ガール！ ガールズ！』)

175

170

165

問一

——(1)「1」2が3の前のこと、なんか心配してたから」とありますが、4の心配とはどのような心配ですか。六十字以内で説明しなさい。
(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問二

(2) 1に入れるのにふさわしい二字の表現を答えなさい。

問三

(3) 1に入れるのにふさわしい季節を次のア～エの中から一つ選び、
記号で答えなさい。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問四

——(4)「時間ってあつという間にすぎてしまう。」とありますが、ひなはなぜそのように感じたのですか。五十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問五

——(5)「頭」とありますが、「頭」を使った次の一～五の慣用句の意味を後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 頭をもたげる
- 二 頭打ち
- 三 頭が下がる
- 四 頭ごなし
- 五 頭が上がらない

【意味】

- ア かくれていた気持ちや考えがあらわれる。
- イ わけも聞かずいきなり決めつけること。
- ウ 感心させられる。
- エ それ以上の見込みがないこと。
- オ ひげめや恩があるのでいばれない。

問六

——(6)「頭の中であれこれ考えないで、ただ笑って、話して……。好きなら、好き。しゃべりたきゃ、しゃべる。それで、いいんだ。」とありますが、ひなは日ごろからどのような行動することが大切だと気づいたのですか。二十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問七

——A～Dに入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ちまちまと
- イ びくうつと
- ウ よたよたと
- エ あたふたと

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 藤崎翔音はかつこよく、女子からたいへん人気があったが、子どもと接するのが苦手で冷たい態度をとってしまう人物であった。
- イ 真彩の母はひっこみじあんの女性であったと思われるが、ひなと出会った後は様子も態度も変わって、積極的になった。
- ウ 真彩はひなのことが大好きであったが、ひなにはそれがうつつとうしく、真彩をおびえさせたりして近づけないようにしていた。
- エ 沙綾の母は真彩の母と話すことをいやがっていたが、ひなの説得によって心を改め、優しく接することを心がけるようになった。

